カナダにおける日本研究の今

楊　暁捷（X. Jie YANG）
（カナダ・カルガリー大学）

去る 2007 年 9 月、日文研創立 20 周年記念国際シンポジウムに招かれ、世界各国から集まった日本研究者と共に、海外における日本研究という大きなテーマをめぐってさまざまな交流ができた。シンポジウムにおいて与えられたテーマは、カナダにおける日本研究。これまで、筆者はカナダの大学に 18 年間近く勤務してきたが、しかしながら、カナダ全土において行われている日本研究の全容をすべて漏れなく述べる知識や能力を持たない。つぎに記すのは、あくまでもカナダで仕事をし、日本語教育と日本研究に携わってきた一個人の観察に過ぎない。

この報告は、カナダの大学教育の概要、日本研究をテーマとする「カナダ日本研究学会」、日本語や日本文化の教師の集まりである「カナダ日本語教育振興会」という三つの項目を中心にまとめてみる。

一、カナダの大学と大学院教育

日本研究の基礎は、いうまでもなく大学という教育機関である。研究に携わる人間、研究のための環境、そして新しい研究者の養成などの社会的なシステムの中から、研究の成果が生まれてくる。

カナダの大学や短期大学は、すべて州立によるものである。ウォータルー大学の Chris Redmond 氏が纏めたオンラインリソース「Canadian Universities」（http://www.uwaterloo.ca/canu/）によると、大学や短期大学はあわせて 102 と数えられる。中では、いくつかの規模の大きい大学は、昔からいくつかの分校を持ち、近年になってわりに新しい大学も同じ州にある中、小の町で分校を作るという傾向が見られた。これに加えて、特定の単科証書、大学レベルのコースを提供する機関（その多くは、州政府の助成を受けながら、団体や地域の組織によって運営されている）などは、さらに 50 近い名前が加えられる。カナダの大学は、学生を積極的に受け入れることに特徴がある。たとえば、大学に入るための高校の成績を十分に持っていない学生でも、短期大学などに入学した翌年から途中で転学することを歓迎し、一定の割合まで他大学での習得科目をそのまま認める。（ただし、このような科目、卒業するための単位数にのみ反映し、在学の平均成績に計算されない。）

以上のような背景において、学生の移動が生まれ、大学間の連結が図られ、そして自然と教育者たちの横の交流が行われる。

大学や短期大学では、日本との関連する科目といえば、まずはやはり日本語である。国際交流基金が行った「海外日本語教育機関調査結果（カナダ）」（http://www.jpf.go.jp/j/japan_j/oversea/kunibetsu/2005/canada.html）によると、2003 年度において、日本語教育を実施した高等教育の機関数は 39、教師数は 101、学習者数は 7092 である。すなわち約四割の大学、短期大学が日本語の授業を提供し、平均にして一機関が２人か３人の教師を擁し、１人の教師は 70 人の学生を教えるという計算になる。筆者の勤務する大学では、過去 10 年ほどつねに常勤、非常勤の日本語教師が５人教えていて、年間約 600 人の学生が日本語のクラスに通っていた。実際の感覚も上記の数字を裏付けるものである。一方では、日本語教育が東アジア諸言語科目の中心で、ときには率先する役目を果たしているのに対して、日本の歴史、宗教、政治、経済などは、東アジア科目の一部となり、ほとんどの大学では特定の分野として独立していないのが実情である。すなわち日本関係の科目がたとえ設けられたとしても、それが他の分野の専門家が兼任するか、あるいは中国や朝鮮についても担当するという前提で日本専門家が務めることになる。それも例えば東アジアという名ではなく、歴史、宗教、経営といった、まったく異なる学科、学部に所属されて、日本という名の下での交流それ自体は、特別な努力を要するものである。

カナダの大学では、日本に関する大学院教育がすこしずつだが、確実に広まる傾向をみせている。中でも、東部のトロント大学と西部のブリティッシュ・コロンビア大学（UBC）は、歴史にしても規模にしても別格である。この二つの大学は、いずれも豊富な蔵書を有する東アジア図書館を持ち、しかも東アジア研究学科においてさまざまな分野の日本研究家を教授陣に集めている。長い教育の伝統に従い、人数こそ多くないが、優秀な学生を育て、その多くは博士号を取得してから、さっそく北米や日本の大学で教鞭を取りはじめた。近年の盛んな国際交流が進む中、カナダの優秀な学生が学部教育を修了してから日本への留学を選ぶのに対して、アジア各国からの留学生、とりわけ日本語を母国語とする日本の留学生たちによるこれらの大学院課程への参加が目立つ。そういう意味で、大学院教育も、すこしずつだが、確実に変貌を遂げている。

二、カナダ日本研究学会（JSAC）

カナダ全国規模の日本研究の組織は、「カナダ日本研究学会」（JSAC: Japan Studies Association of Canada）である。学会のメンバーは、主にカナダの大学、研究機関、それに政府の調査機関などに勤める日本研究に携わる学者、研究者、大学教官たちからなる。（**図１**）

図１ JSAC 公式サイト(http://udo.arts.yorku.ca/jsac/)

JSAC の活動の中心は、年１回の学会の運営である。1987 年の予備大会を経て、JSAC 第一次大会は 1988 年にマギル大学で行われ、今年はちょうど 20 年目となる。研究大会で取り上げられる課題は、最初の時期は主に政治、経済、歴史などを中心としたが、その後、さらに文学、文化、言語教育なども加わり、発表論文の中で占める割合も近年明らかに増え続けている。発表論文はつねに公募をもって集められ、複数の学者による匿名の審査などを経て、最終の大会プログラムが作成される。年次大会の開催地は毎年変わり、主催校のメンバーが中心となってその年の運営委員会を結成し、いわば研究会の伝統を踏まえながら、主催者の努力などを反映する新しい機軸が毎年打ち出されている。なお、カナダにおける大学院教育の発展に伴い、最近数年の傾向としては、日本を含むカナダ以外の学者たちの参加、それに若い学者、とりわけ大学院生への発表の場の提供、大学院生を対象とした論文賞などの表彰が挙げられる。（表）

今年の年次大会は８月中旬にトロントのヨーク大学で開催され、「Japan and its Eventuality - Pushing the Envelope Further」との大会テーマを掲げ、三日にわる大会期間では、合わせて 25 のパネルが設けられ、59 本の論文が発表された。大会の運営委員長は、ヨーク大学の太田徳夫氏である。年次大会 20 周年という節目に相応しく、大会プログラムには、特別にカナダや南アメリカ、ヨーロッパ在住の日本人一世、カナダの大学などの場で活躍する日本人二世の代表を招き、それぞれ違う時代における経験談を語らせ、さらにオーストラリア日本学会、日本カナダ研究学会との交流の場を設けた。

一方では、研究者の絶対数の少ないことの反映だろうか、大会論文は互いに離れた分野や研究テーマを取り扱い、特定のテーマに限っての交流が十分に行われたとは言えない。一例として、今年の学会での筆者が参加したパネルには、あわせてつぎの３本の発表が組まれた。

Transformations of the Material Culture of the Hara-obi
Adapting Chinese Legends into Japanese Popular Culture
Medieval Picture Scrolls in the Contemporary Time

表　JSAC 年度大会一覧（JSAC 公式サイトに基づく）

年度	会場	大会テーマ
1987	University of Alberta, Edmonton	Conference on Modern Japan
1988	McGill University, Montreal	
1989	York University, Toronto	
1990	University of British Columbia, Vancouver	
1991	University of Manitoba, Winnipeg	
1992	Carlton University, Ottawa	
1993	Concordia University, Montreal	
1994	University of Alberta, Edmonton	
1995	University of Victoria, Victoria	
1996	Saint Mary's University, Halifax	
1997	University of Toronto, Toronto	
1998	University of Northern British Columbia, Prince George	Japan after the Economic Miracle: In Search of New Directions
1999	McGill University, Montreal	Mediating Japan: Transformations in the Production of Japanese Culture
2000	University of British Columbia, Vancouver	Japan and Asia Pacific in the 21st Century: History, Culture and Policy Issues
2001	University of Saskatchewan, Saskatoon	Japan in the Age of Globalization
2002	University of Calgary, Calgary	Japan in a Changed World
2003	McMaster University, Hamilton	
2004	University of Victoria, Victoria	Why Japan Matters!
2005	University of Alberta, Edmonton	Connections & Identities in East Asian and Beyond
2006	Thompson Rivers University, Kamloops	Japan at Our Doorstep and in the Changing Global Community
2007	York University, Toronto	Japan and its Eventuality - Pushing the Envelope Further

わずかに「日本の伝統と現代生活」ということで共通点が見出せられ、主催者の運営の苦心が伺える。

なお、JSAC の年次大会は、これまで主催校担当者の責任で何回かその年の発表論文が単行本として刊行された。最近のものとしては、『Japan After The Economic Miracle』（Netherlands: Kluwer Academic Publishers, 2000）、『Why Japan Matters!』（Victoria: University of Victoria, 2005）がある。諸般の事情から、大会論文集の出版は学会運営内容とはなっていない。

ちなみに、筆者はこれまで直接に JSAC の運営に参加した経験がない。ただし、1995 年から、長期間の日本滞在以外、毎年の例

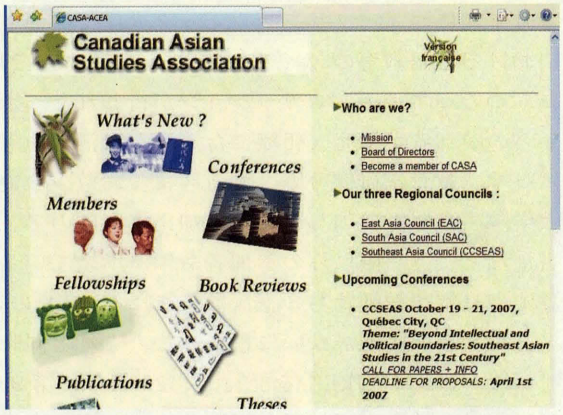

図２　CASA 公式サイト(http://canadianasian studies.concordia.ca/htm/maine.htm)

会にはずっと参加して、上記の二つの学会論文集にも発表原稿を寄せた。

一方では、JSACと並行して、比較的に規模が小さくなるが、「カナダアジア研究学会」（CASA: Canadian Asian Studies Association）の東アジア支部会も毎年集まり、日本をテーマとする研究が発表される。（図２）

三、カナダ日本語教育振興会（CAJLE）

カナダの日本語教師の全国的な組織は、大学や中等教育、日本語学校から参加者が集まる「カナダ日本語教育振興会」（CAJLE: Canadian Association for Japanese Language Education）である。CAJLEは、2008年に成立20周年を迎える。

CAJLEははじめにトロント大学やトロント日本語補習校の教師、大学院生や関係者が中心になって発足され、その第１回の集会は、「現職日本語教師研修会」との名で1988年夏にトロントで行われた。その当時から、それぞれの地域における日本語教師の集まりは多数あり、バンクーバー日本語教師会など、いまなお地道な活動を続けており、規模のより小さいものとしては、エドモントン、カルガリーなどの都市の日本語教師の集まりも定期的な活動を行っている。これに対して、CAJLEはトロント地域でのさまざまな活動に加えて、トロント以外からの教師の参加を積極的に受け入れてきた。その結果、いまや15名前後の理事会のメンバーの大半はトロント以外からの参加者であり、カナダ全国のみならず、アメリカや日本からの顔ぶれまでいる。年次大会や論文集の出版を通じて、カナダの日本語教師の象徴的な組織に成長した。

CAJLEの大きな行事は、年一度の年次大会である。例年、研究発表と教師研修という二つの内容を中心に据え、国際交流基金などの助成を受けて、日本から講師を迎えて日本語教育の最新の情報を知り、教授法を習う。2007年度の年次大会は、８月下旬にニューブランズウィック大学で開催され、「今の日本語—そしてカナダにおける言語教育の今」を大会テーマとして、21本の論文と四つの研修会、それに一つのパネルディスカッションが行われた。さらに、年次大会には、カナダ以外からの参加者が増え、組織にたいへんな活力をもたらしている。とりわけ日本からは日本語教育を研究分野とするいまなお数少ない大学院課程の指導教官、在学中の大学院生たちが参加し、これに加えて、隣のアメリカはもとより、トルコ、韓国、香港など、英語圏以外の参加者も年々増えている。大会の公式言語は日本語であり、各国の日本語教師たちの交流はまさにCAJLEの大きな特徴の一つとなって、カナダと世界との距離が大いに縮まった。これと同時に、CAJLEは1997年から論文集『ジャーナルCAJLE』を発行し、2007年に第９号を出版した。論文の掲載など、編集委員会は丁寧で厳正な審査を行い、高い水準を保っている。さらに、「CAJLEニュースレター」は年２回発行し、学会動向や地域の活動報告などの内容に留まらず、会員の随筆なども加わり、つねに20枚前後の分量になる。２年前

からニュースレターは電子発行に切り替え、過去4年半のものはすべてオンラインに公開している。CAJLEのサイトは、出版物の案内や公開に加えて、過去20年にわたる活動報告、写真を含める最近数年の年次大会の記録など豊富な資料を提供している。（図3）

なお、筆者は2003年からCAJLEの理事会に参加し、広報関連の役目を与えられ、とりわけニュースレターの編集やホームページの制作、管理を担当している。

図3 CAJLE公式サイト (http://www.cajle.net)

四、まとめに代えて

以上、二つの研究会を通じて、カナダにおける日本研究と日本語教育にまつわる様子の一端をごく簡単に紹介した。繰り返しになるが、ここに述べられてきたものは、すべて筆者の経験や個人の理解によるものであり、行き届かなかったり、ひいては誤解したりしたことがあれば、それもすべて筆者個人の責任にある。

もともと、研究の環境、あり方などはたえず進化し、多様化された今日において、個々の研究者の関心やいろいろなレベルでの交流、研究の業績、そしてそれがもたらした英語圏あるいは日本語圏での影響など、これらすべてを全体的に眺めることは、およそ一個人の観察、報告の範囲を超える。さらに言えば、情報化社会が進んだ今日では、カナダという国という枠組みでの観察は、自ずとその限界がある。言語、地域、分野、そして発信の方法など、在来の分け方に囚われないことこそ、今日の学術研究の特徴だと言えよう。そのような新たな研究のあり方がすこしずつ姿を見せ始めたいま、あるい

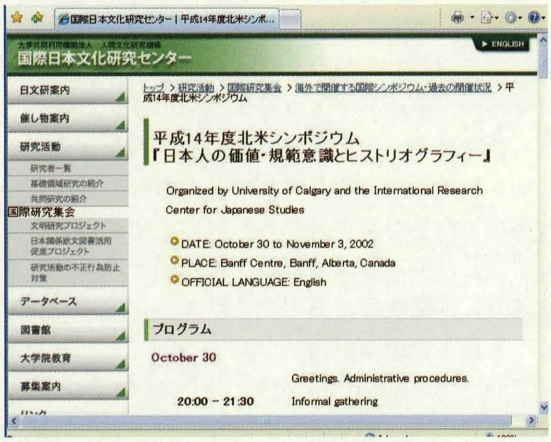

図4　日文研・平成14年度北米シンポジウム

はカナダのような、横の繋がりの緩い国が一番さきにその恩恵を受けるのかもしれない。これに関しては、あえて一つの例を挙げるとすれば、いまから5年前にバンフで行われた国際集会がそれに当たるのではないかと思われる。すでに報告集まで出版されたので、ここでは多く触れないことにしよう。（図4）

最後に、日文研創立20周年に当たり、国際的な交流の場に招いてくれた集会の主催者、そして充実した数日の交流を陰で支えてくれたスタッフにあらためて感謝を申し上げたい。